『地球はピンポン玉』

エスタディオ・ナショナル（国立競技場）の正面玄関口。1952年10月27日建設とある

世界でもっとも大きいボール、それは地球。もっとも小さくて軽いピンポン玉を追い回すうちに、いつの間にか私は日本の反対側に位置する、ペルー共和国にたどりついていた。

昨年ペルー共和国では、日系初のアルベルト・フジモリ大統領が誕生し、日本中がその快挙にわき、世界中が驚いた。東欧の民主化革命に、東西ドイツの合併、イラクのクウェート侵攻……など、激動する世界情勢と、地球温暖化や酸性雨、オゾン層の破壊などの環境問題を抱えたわれらが地球。

この回転するボールは、もはや50億を越える人類社会にとって、あまりにも小さく、しかももろい。と同時に、実際に知れば知るほど奥が深くて、美しく、魅力あふれるボールでもある。

そう！　だから……

〝地球はピンポン玉〟

チャンピオンになれるほどの才能もなく、就職もせず、中途半端だった私が、ペルーでの2年4カ月の指導活動を通じて得たものは、友情とこのピンポン玉のような世界の一端を感じたこと、だろうか。

気負わず、恐れず、自分を見失わず、ピンポン玉をだいじにする心が、地球をだいじにする心に結びついたとしたら、こんなに素敵なことはないだろう。

今回は、そんな私の思いと卓球指導体験の一端を、ぜひともみなさんに紹介したくてペンをとることにした。卓球レポートの読者みなさんがペルーや南米の国々、そしてピンポン玉を追いかける世界の仲間たちを、少しでも身近に感じることができたら、これ以上の喜びはありません。

国際協力事業団
田中　敏裕
（早稲田大出）

はじめに

屋外エキシビション

高く投げ上げられた白球がねずみ色の空へとすい込まれていく。〝ホーッ〟と息をのむ観衆のどよめき。上空を舞う意地悪なつむじ風にこずかれて、2・5グラムのセルロイド球は大リーグボールのごとく揺れてよろめきながら落ちてきた。「おい、おい、そりゃないぜ」

あっけなく空を切るラケット、台上ではなくコンクリートの校庭にポンポンコロコロと転がっていくピンポン玉を見て、一斉に子供たちの嘲笑がわき起こった。

「エキシビシオン　デ　テニスデメサ　ポルカンペオン　ハポネス！　（日本チャンピオンによる卓球の模範試合だよ）」

校内放送のスピーカーが、さっきからチャンピオンの出血大サービスで全校生徒を呼び集めている。そのおかげか、最初はまばらだった見物の生徒の数もふえ始め、卓球台を取り囲んでいる生徒に、校舎のベランダから見下ろす生徒を合わせると、400人ぐらいはいるだろうか。

コの字型をした校舎の中庭に一台の卓球台がすえつけられ、そこに遠いカラテとサムライの国からやってきた日本人青年の姿があった。

〝落ち着けっ！　これぐらいのことでビビってたんじゃ日本男児の名が泣くぜ〟

何事もなかったような顔をして、すぐさまボールを拾い上げ、キッと鬘天をにらみ風を探る。ふたたび舞い上がる白球。その落下スピードを利用して最大の回転を引き出す、中国発祥の投げ上げサービスだ。

出て、まったく笑いごとではなかった。

卓球連盟の事務所は3階の壁の中にあった。そこは、ガランとした空洞の外壁をはうように取りつけられた細い階段を上がり、幅5メートルほどの中2階と中3階の踊り場を通り抜けた突き当たりで、観客席を支える壁をくり抜いた狭い部屋だった。

「ムーチョ グスト デ レシビールテ（ようこそいらっしゃいました）」。

迎えてくれたのは、ペルー卓球連盟会長のグラディス・モリヤマ女史である。モリヤマという姓でわかるように彼女は日系二世で、かつての南米チャンピオン。専修大学で卓球修業をしたことがあるという。30代後半だろうか、キビキビした話しぶりと落ち着き払った態度は、オバタリアン議員かPTA会長に推せんしてもよいほどだ。ただし彼女はセニョリータ（未婚女性）とのこと。日本でも最近はふえているようだが、中南米では独身のキャリアウーマンがかなり多い。中南米独特のマチスモ（男性優位の考え方）的な風潮の中で、彼女らは、一種の根強い男性不信を心に抱いているように思われた。

チチカカ湖で湖上生活を営むウロス族の人々。トトラと呼ばれる草の一種でできた浮島に住んでいる

グラディス会長は、一言も日本語を話さずにスペイン語だけで説明し続けた。日本語を聞いて理解することはできても、自分で話すのはへただから、と彼女はいう。ペルー日系人学校で日本語教師をしている仲間の話を聞いてみても、日系二・三世にとって日本語はすでに外国語であり、話せる生徒はほとんどいないそうだ。ペルー人として生きる彼らにとって当然のことなのだろう。どうせ勉強するなら英語のほうが役に立つのも確かだ。寂しい気はするが、日本語を話せる日系人は着実に減っている。ちなみにペルーのフジモリ新大統領は、日本語は堪能だという。

「よく来てくれましたね。今いる中国人コーチは、確かに技術や知識は一流なんですが、仕事熱心じゃなく怠けて困ります。あなたは、若くてスペイン語も話せるようだから、本当に期待していますよ」。

語学の特訓のおかげで、私にもグラディス会長の話の内容はだいたいわかった。どうやら中国人コーチとはうまくいっていないらしい。その分こっちに対する期待が強まったかっこうだ。これは私を売り込む絶好のチャンスではないか。雲の上の存在だったはずの中国人コーチが、この南米・ペルーの地にあって、突然、私と同じ土俵におりてきた、そんな思いに胸が高鳴った。とりあえず2週間後に迫ったパンアメリカ大会に出場する選手の練習を手伝って、その後はグラディス会長の念願である学校児童への卓球指導と普及活動を担当することとなった。

ペルーで卓球を普及させるには

彼女の話によると、「スポーツへ青少年の目を向けさせることで、学校の中まで浸透している麻薬の害から子供たちを救うこと」が、一番の目的だという。ペルーの抱える問題の根は想像を絶するほどに深い。ただ卓球を教えることだけ考えていた自分の認識の甘さと浅はかさを知らされた。

8月の、パンアメリカ大会では、ユダヤ系ペルー人のワルター選手が日系ブラジル人のカノー選手に勝って、堂々3位入賞を果たした。連盟にお金の余裕がないため、中国人コーチは結局ペルーに残って選手だけの大会参加だった。

私は、リマ市内の学校やスポーツクラブでエキジビションをいくつか開催し、三つの小・中学校で指導を開始した。

学校側の理解がなく、生徒集めに苦労し、しかも、国立の学校にくる生徒は、たいてい貧乏な家庭の子供であるため、ラケットやボールなど買えるわけもなかった。そこで、国際事業団のほうからの支援で用具を購入し、授業のたびに自分で用具を持ち歩いて指導した。

しかし、こんなやり方では私が日本に帰れば、続けられなくなることは明らかだった。結局、グラディス会長が任期を終えモレノ会長に代わったときに、学校指導プロジェクトは、立ち消えとなった。ウルトラセブンの歌をうたってあげると、キャッキャッと走り回って喜んだ子供たちに、卓球が、続けたければ、エスタジィオにきなさい、と地図まで書いて渡したけれども、ひとりも姿を現わすものはなかった。考えてみればそんな小さな子供が親の承諾もなしに、バスを乗り継いで練習にこれるわけもないし、余裕のない家庭の事情がそれを許すわけもなかったのだ。

ペルー女子バレーの生みの親である故加藤明監督は、背が高くてジャンプ力のある少女をペルー中から探しだして、地方出身の選手は自分の家で引きとって、学校へも通わせたという。ペルーチームは、みる間に上達し、南米チャンピオンとなり、世界で活躍し始めた。今ではペルー中で、男はサッカー、女はバレーというスポーツ観ができあがり、アンデス山村でもバレーを楽しむ姿を見ることができる。直接の普及活動よりも、トップのレベルが向上して、国際的に活躍することのほうが、国民の目を向けさせ、普及効果もあげられるのではなかろうか。

なんとかトップのレベルを引き上げたい。それがこの国で卓球の灯を消さずに、キャンドルサービスのように、各地に飛び火させていく最も効果的な方法に違いない。陸上やバレーの隊員や専門家と会って互いに討論するうちに、私の目標も定まってきた。

「よし、まずは南米大会で優勝するんだ。それから世界にも目を向けさせなくては……。世界を目指さぬかぎり進歩はあり得ないし、南米の中でも取り残されてしまうに違いない」

とりあえず10月の南米大会にアシスタントコーチとして参加して、南米のレベルをこの目で確かめることにした。（つづく）

サクサイワマンと呼ばれるインカ帝国の城塞跡で、トレーニングに励む選手と筆者

は出したが見つかる可能性は少なく、先が思いやられる。

国際協力事業団の高橋調整員と、バレーと陸上の先輩隊員が出迎えに来てくれていた。ペルー人とスペイン語の異様な雑踏の中で、日本人の姿を見ると、もう10年来の友人に会った気がしてホッとする。それにあえて途上国に夢を求めてきた仲間同士という親近感がある。

空港からリマ市内まで車で20分。くすんだレンガづくりの四角い家並み、所々に白いペンキを塗りたくったほこりっぽい建物群は、うらぶれた西部劇に出てくるような街並みを思い出させる。

AJINOMOTO、TOYOTA、NATIONAL……といった見慣れた名前の看板が、道路脇に立ち並んでいるのが、なにか奇妙で不思議な気がする。世界の隅々まで日本企業は進出しているのだ。

スポーツの総本山 エスタディオ・ナショナル

リマのパセオデラレプブリカ（首都高速道路）を都心に向かって北上すると、上り斜面に差しかかった左手に、巨大なドーム状の建物が姿を現わす。コロセウムを思わせるそのドームこそ、ペルー最大の国立競技場・エスタディオ・ナショナルである。その弧を描いた最上段には、過去、国際レベルの大会で輝かしい成績をおさめたチャンピオンたちの名前が、月桂樹に縁どられてレリーフされている。目立っているのは、故アキラ・カトウ監督とマンボーパク現監督（韓国人）に率いられて世界女子バレー界を席捲した南米の魔女ともいうべき選手らの名前と、中南米でもっとも人気のあるフットボール（サッカーのこと）選手の名前である。卓球では、2度南米チャンピオンに輝き、若くして急逝したレガルダ選手の名前が、ひとり気をはいていた。ここに名を連ねることはペルーのスポーツ殿堂入りのようなもので、スポーツマンにとって最高の名誉であり、夢なのだ。

このエスタディオ・ナショナルの中に、卓球連盟とその練習場があった。初めてその鉄の扉を叩いた日も、フットボールに興じる子供や人人でエスタディオのまわりは賑わっていた。3階までビッシリと壁にはりついたガラス窓の大半が割れたままで、特に1階の窓は壊滅状態。ガラスのかわりにベニヤ板があてがわれている。ペンキもとっくにはげ落ちて、くたびれた土色の地肌を天空にさらしているエスタディオだが、その堂々たる巨体は、いまなお威厳を保っていた。

卓球連盟に乗り込む

さて、車のガレージのような鉄の扉をガンガン叩くと、中から、ラケットを持った選手らしい子供が開けてくれた。とたんに、私の耳に、リズミカルなピンポン玉の響きが飛び込んでくる。ペルーにくる前の派遣前訓練中はずっとかん詰めにされたままで、まともに練習する機会もなかったので、やけに懐かしい。

こんな地球の反対側にも、ピンポン玉を追っかけて、毎日打ち合っている人たちがいたなんて！　いいようのない不思議な感動にとらわれて、震えが足の先から頭のてっぺんへジーンと駆け抜けていくのを感じた。

「どや、あいつらにホンマに勝てるんか」関西弁風の高橋調整員の実にごもっともな質問に振り向くと、白人とモレノ（褐色）の若者が火花でも飛び散りそうな勢いでボールを打ち合っていた。

その中央の椅子に腰かけているのが、3カ月ほど前に到着したという中国人コーチのうちのひとりだろう。2年間の指導活動が、日中共同となるのか、はたまた日中対抗になってしまうのか、少なくとも今言えることは、人数と経験と実績、それに世界卓球の現状からみて、私の出る幕はほとんどなさそうだ、ということだけだった。

「はあ、なんとかなるとは思いますが……」しばらくラケットを手にしていない私の右腕には、ペルー選手たちですら荷が重すぎるように思われ、心もとなかった。

クスコの中央広場にて、カルロスとパラレオス選手とともに撮影。ちょうど閲兵式が行なわれていた

見上げると天井が異様に高い。外壁側から内側に向かって、ギザギザの状態になって急角度で傾斜して近づいてくる。理由はすぐわかった。エスタディオの観客席の階段を、裏側から見上げていただけのことだったのだ。エスタディオの内側の空洞には、各スポーツ連盟の練習場と事務所がひしめき合っていて、30あまりのブロックに仕切られた中の10番目の扉に卓球が入っていた。

後日談であるが、フットボールの試合のあった翌日は要注意日で、興奮した観客が床を足で踏みならすため、腐蝕した漆喰がパラパラとはげ落ちて練習場の台や床は真っ白になっている。練習中に1キログらいの塊がゴソッと落ちてくることもあって、頭に当たらぬことを祈るかヘルメットをつけて練習するか、実際、ケガをする選手も

出て、まったく笑いごとではなかった。

卓球連盟の事務所は3階の壁の中にあった。そこは、ガランとした空洞の外壁をはうように取りつけられた細い階段を上がり、幅5メートルほどの中2階と中3階の踊り場を通り抜けた突き当たりで、観客席を支える壁をくり抜いた狭い部屋だった。

「ムーチョ グスト デ レシビールテ（ようこそいらっしゃいました）」。

迎えてくれたのは、ペルー卓球連盟会長のグラディス・モリヤマ女史である。モリヤマという姓でわかるように彼女は日系二世で、かつての南米チャンピオン。専修大学で卓球修業をしたことがあるという。30代後半だろうか、キビキビした話しぶりと落ち着き払った態度は、オバタリアン議員かPTA会長に推せんしてもよいほどだ。ただし彼女はセニョリータ（未婚女性）とのこと。日本でも最近はふえているようだが、中南米では独身のキャリアウーマンがかなり多い。中南米独特のマチスモ（男性優位の考え方）的な風潮の中で、彼女らは、一種の根強い男性不信を心に抱いているように思われた。

チチカカ湖で湖上生活を営むウロス族の人々。トトラと呼ばれる葦の一種でできた浮島に住んでいる

グラディス会長は、一言も日本語を話さずにスペイン語だけで説明し続けた。日本語を聞いて理解することはできても、自分で話すのはへただから、と彼女はいう。ペルー日系人学校で日本語教師をしている仲間の話を聞いてみても、日系二・三世にとって日本語はすでに外国語であり、話せる生徒はほとんどいないそうだ。ペルー人として生きる彼らにとって当然のことなのだろう。どうせ勉強するなら英語のほうが役に立つのも確かだ。寂しい気はするが、日本語を話せる日系人は着実に減っている。ちなみにペルーのフジモリ新大統領は、日本語は堪能だという。

「よく来てくれましたね。今いる中国人コーチは、確かに技術や知識は一流なんですが、仕事熱心じゃなく怠けて困ります。あなたは、若くてスペイン語も話せるようだから、本当に期待していますよ」。

語学の特訓のおかげで、私にもグラディス会長の話の内容はだいたいわかった。どうやら中国人コーチとはうまくいっていないらしい。その分こっちに対する期待が強まったかっこうだ。これは私を売り込む絶好のチャンスではないか。雲の上の存在だったはずの中国人コーチが、この南米・ペルーの地にあって、突然、私と同じ土俵におりてきた、そんな思いに胸が高鳴った。とりあえず2週間後に迫ったパンアメリカ大会に出場する選手の練習を手伝って、その後はグラディス会長の念願である学校児童への卓球指導と普及活動を担当することとなった。

彼女の話によると、「スポーツへ青少年の日を向けさせることで、学校の中まで浸透している麻薬の害から子供たちを救うこと」が、一番の目的だという。ペルーの抱える問題の根は想像を絶するほどに深い。ただ卓球を教えることだけ考えていた自分の認識の甘さと浅はかさを知らされた。

ペルーで卓球を普及させるには

8月の、パンアメリカ大会では、ユダヤ系ペルー人のワルター選手が日系ブラジル人のカノー選手に勝って、堂々3位入賞を果たした。連盟にお金の余裕がないため、中国人コーチは結局ペルーに残って選手だけの大会参加だった。

私は、リマ市内の学校やスポーツクラブでエキジビションをいくつか開催し、三つの小・中学校で指導を開始した。

学校側の理解がなく、生徒集めに苦労し、しかも、国立の学校にくる生徒は、たいてい貧乏な家庭の子供であるため、ラケットやボールなど買えるわけもなかった。そこで、国際事業団のほうからの支援で用具を購入し、授業のたびに自分で用具を持ち歩いて指導した。

しかし、こんなやり方では私が日本に帰れば、続けられなくなることは明らかだった。結局、グラディス会長が任期を終えモレノ会長に代わったときに、学校指導プロジェクトは、立ち消えとなった。ウルトラセブンの歌をうたってあげると、キャッキャッと走り回って喜んだ子供たちに、卓球が、続けたければ、エスタジィオにきなさい、と地図まで書いて渡したけれども、ひとりも姿を現わすものはなかった。考えてみればそんな小さな子供が親の承諾もなしに、バスを乗り継いで練習にこれるわけもないし、余裕のない家庭の事情がそれを許すわけもなかったのだ。

ペルー女子バレーの生みの親である故加藤明監督は、背が高くてジャンプ力のある少女をペルー中から探しだして、地方出身の選手は自分の家で引きとって、学校へも通わせたという。ペルーチームは、みる間に上達し、南米チャンピオンとなり、世界で活躍し始めた。今ではペルー中で、男はサッカー、女はバレーというスポーツ観ができあがり、アンデス山村でもバレーを楽しむ姿を見ることができる。直接の普及活動よりも、トップのレベルが向上して、国際的に活躍することのほうが、国民の目を向けさせ、普及効果もあげられるのではなかろうか。

なんとかトップのレベルを引き上げたい。それがこの国で卓球の灯を消さずに、キャンドルサービスのように、各地に飛び火させていく最も効果的な方法に違いない。陸上やバレーの隊員や専門家と会って互いに討論するうちに、私の目標も定まってきた。

「よし、まずは南米大会で優勝するんだ。それから世界にも目を向けさせなくては……。世界を目指さぬかぎり進歩はあり得ないし、南米の中でも取り残されてしまうに違いない」

とりあえず10月の南米大会にアシスタントコーチとして参加して、南米のレベルをこの目で確かめることにした。（つづく）

『地球はピンポン玉』〈2〉

ペルーのクスコで開かれた中南米大会の開会式。子供たちが各国の民族衣装で入場行進

ナショナルチームと中国人コーチ

南米ではジュニアと一般の大会を、毎年交互に開催している。今年はジュニアの大会に当たっており、主催国はブラジルだった。ペルーは、インファンティール（14歳以下）とフベニイール（17歳以下）の各カテゴリーの男女4人ずつ、総勢16人の選手団をエントリーしていた。

ペルーのナショナルチームの選抜方法はいたって単純。連盟によく練習にきている首都の選手と、実力があると思われる数人の地方の選手を交えて、3回の総当たりリーグ戦を行ない、上位4人を選ぶのである。

この国で本格的に卓球を練習している子供の数など、たかがしれている。男子でカテゴリー7～8人、女子はせいぜい4～5人で、代表への門は日本と違いかなり広い。とはいえ、10数年前から中国人コーチが入って指導しているだけあって、技術レベルは意外に高い。特に8歳ぐらいから集中指導を受けているフベニイール女子のモニカやマガリ、インファンティール男子のモイセスと女子のエリアナといったトップ選手は、日本でも中学・高校の県代表クラスはいけるだろう。ペルー卓球界の問題は、選手層の薄さとあまりに選手が練習しなさ過ぎることにあった。

練習改革

大会出発2週間前になっても、選手が全員そろったことも、時間割りどおりに練習が行なわれたこともなかった。もともとオラペルアーナ（ペルー時間）といって時間にはルーズで、待つことにも待たせることにもなれ切ってしまっている社会風潮があることと、半数以上の選手が親に送り迎えしてもらっているために、親のつごうで練習場にくる時間も帰る時間も決まってしまうことが、その原因である。

「どうしようもないね」と首をすくめる劉コーチは、自分の責任外だね、というふうで、持病の腰痛が出始めたのか腰を叩きながらすぐベンチで横になるのだった。

こんな状態のチームを、たとえアシスタントであれ、引率する気にはとてもなれない。私はペルー人コーチと話し合い、練習を改善し選手の意識を改革しようと決意した。それにはまず劉コーチを説得する必要があった。翌日（11日）、私は劉コーチに練習改革の必要性を訴えた。劉コーチは言葉を濁して逃げていたが、大学で習ったカタコトの中国語で、いつになく真剣な私の態度に折れて、最後は了承してくれた。あとで思ったが、それがグラディス会長の考えではないかと、劉コーチが勘違いをしたのかもしれない。翌12日午後5時、選手全員を集めて緊急会議を開いた。険しい表情の私とペルー人コーチの様子に、ふだんはさわがしい子供らも徐々に声をひそめた。

「きょう集まってもらったのはほかでもない。南米選手権に向けてのみんなのやる気を聞かせてもらいたかったからだ。いったいお前たちはペルー代表ということをどう考えているんだ。こんな練習で勝てると思っているのか。これから練習時間にちゃんとこないヤツは相手にしないからそう思え。途中で勝手に帰ることも許さん」。

選手たちの反応は予想外で、彼らからも「いままでの練習じゃダメだ」という不満が噴出したのだった。大会を目前にして選手たちも不安だったのだ。翌13日午後5時、初めて全員が勢ぞろいし、新しいスケジュールのもとで練習が始動した。ボールを追う選手の目も真剣そのものでムダ話をするものもいない。やればできるのだ。「どうしてもっと早くこんな練習をさせてくれなかったんだ。あと2週間しかないのに遅すぎるよ」。キャプテンでただひとり日系の男子選手の星の言葉が耳に痛かった。これから大学進学を控えた星にとって、この南米大会が最後の大会になるはずだった。

中国人コーチの逆襲

練習場に緊張感が生まれると同時に、場外でも余分な緊張が生まれ始めていた。練習場の主導権を握り、日に日に選手の信頼を集め出した日本の若僧に対して、中国人コーチたちが危機感をつのらせ、反発し始めていたのである。もともと今回の改革の目的は、練習場に規律とやる気をもたらすことにあり、それさえできればあとは劉コーチをたてて、自分はアシストに徹しようというのが私の考えだった。しかし、劉コーチ自身が練習開始に遅れてくる上、2日目は、ゲリラのテロの関係で道路が封鎖されたとかで練習場に現われず、結果的に私が中心になって練習を指示することになってしまったのである。改革後3日目も、5

国際協力事業団
田中 敏裕
（早稲田大出）

をかけてやってくれよ」。ギョロリとした目で迫るその父親には、まるで脅迫でもされているようである。わが子には抱擁を与え、私には責任を与える親たちの別れの儀式は、そうやってひと巡りした。

滑走路を滑る車輪の震動がフッととぎれ、翼下にリマの灯が遠ざかっていく。「どうか、子供たち全員を無事にこのリマ空港に連れて帰ってこれますように！」ひたすら祈らずにはいられなかった。

大会？それとも買い物ツアー？

午前8時リオ着。やや古ぼけてくすんだ感じの街並とはいえ、高層ビルや一流ホテルが立ち並ぶリオの偉容はリマとは比較のしようもない。「リマは南米の田舎町さ」と語ったペルーの友人の言葉もうなずける。

さて、ブラジルに着いて選手が真っ先にかけつけたのがスポーツ用品店だ。リマの半額か3分の1の値段だといって買いあさる。驚いたのは、彼等が持ってきた小遣いの額の大きさである。だいたい500ドルから1000ドルの間で、あれだけもめた旅費の2～3倍。ペルーの最低賃金（約60ドル）のおよそ10倍の額なのである。私が持参したお金はわずか300ドル（協力隊の1カ月分の手当額）なのだから、選手の親たちにだまし討ちにでもあった気分である。おまけに買い物に夢中で集合時間に遅刻する始末で、怒りを通り越してもう情けなくなる。

こうした買い物旅行はその後も大会のたびにくり返されることになる。工業用品が不足し輸入品が2～3倍の値になる発展途上国の人々は、海外に出た機会を最大限利用して買い出しをし、手荷物で持ち帰る。だれかが海外へ行くとなると、親類や友人がお金をかき集め、買ってきてほしいものを頼むことはよくあることで、逆に、そういう人相手に商売する者もいる。

白い砂浜と緑の公園、コパカバーナの海岸はまさに絶景だった。海が透きとおるように青いというのは、南国の特権だろう。ペルーの海が灰色に沈んでいるのは、フンボルト海流という南極から来る寒流の影響である。南米の情熱的で明るいイメージは、おもに大西洋側の話であって、センチメンタルで陰気な太平洋側との風土の違いは、日本の太平洋岸と日本海岸の陰陽の違いとどこかにている。

古川敏之氏の教え！

翌28日、リオから内陸へバスで約3時間、大会開催地のボルタ・レドンダ市に着く。大会日程もまだわからず、練習場もないという状態で、不安だけがつのっていく。

29日午前10時、各国代表を集めて初めての会合が開かれた。昨夜作成したと思われる団体戦の日程が配布されて承認された。夜8時開会式、9時試合開始というあわただしいスケジュールである。会議はすべてスペイン語である。唯一ポルトガル語を使うブラジル人もだいたいスペイン語を理解できるし、双子のような言葉なので互いに違う言葉を話していても、十分会話になる。外国にいて言葉が通じるほどありがたいことはなく、その点、中南米は便利だった。

午後体育館に出かけ久々の練習を行なった。天井と壁の間が吹きっさらしになっている体育館で、近くの製鉄工場の廃塵が飛んできて目に入るため、みんなすぐに目が真っ赤になった。いまの日本では考えられない公害である。

あとからやってきたブラジル選手団の中から見覚えのある日本人が笑顔で歩み寄ってきた。カットの名選手であった古川敏之さんであった。古川さんは1カ月の予定でブラジル選手の指導に当たっていた。

「やあー田中君元気そうだね。手紙をどうもありがとう。こっちの選手はいいかげんでね。君の手紙のおかげで、ペルーの選手はお前らに勝つって言っているぞ！　そんな練習でどうするってハッパをかけたら、目の色を変えてやり始めたんだよ……」。

私はアッと言葉を失った。「いまブラジルにいる」と古川さんから葉書をもらい嬉しくなって書いたあの手紙がそんな結果を生んでいたとは……。一番悪い相手に手のうちをさらけ出し、しかも眠っていた選手のやる気に火をつけてしまったのだ。あまりに軽率な初歩的な失敗だった。

ボルダ・レドンダ市の南米大会会場の様子。客席はコンクリートである

大会開幕

開会式は予想外に華やかだった。吹奏楽団に、子供たちの団体遊戯、女子大生の新体操、エキジビションマッチ……など、大がかりな式典に会場がわいた。ブラジルの国民は祭り好きであると同時に祭り上手だな、と感心する。

進行が遅れたため第1試合が始まったのが10時すぎ。フベニイールの男子がチリと対戦する。ほかの選手はホテルに帰らせて、ひとりで監督兼応援団長になって、眠そうな選手たちを叱咤激励する。しかし、初めての試合は、キャプテンの星が2点取ったものの3－5で敗れた。

全試合が終わりホテルに帰り着いたのが午前2時、翌朝は選手を起こして7時には食堂へ行くバスに乗らなければならない。劉コーチはビザが取れなかったのか、結局来れないことになった。私は、4チーム16選手の監督として、かた時も休む間のない戦いの中心に、いやおうなく押し出された。

人生最悪の日

11月1日、ペルーにとって今大会最大のヤマ場であるフベニイール女子の優勝を決める試合と、インファンティール男子の1～3位を決める試合が行なわれた。ともに相手はブラジルで、女子は全勝同士互角の争い、男子はすでにチリに1敗しており、5－1で勝てば逆転優勝できるが、戦力的には劣勢だった。

運悪く2試合とも夜8時という同じ時間帯に組まれていたため、たったひとりのコーチである私が、中央2台のコートの真ん中に陣取って両方の選手を指揮しなければならなかった。対するブラジルは、それぞれのチームに日系のコーチと監督がついた上に、あの古川さんがどっしりとベンチに

左からダニエル、イサム、モイセス、ウゴ。ウゴとイサムは現在ブラジルナショナルチームのメンバーである

構えていた。『負けるものか！』

1ゲーム目、男子の1番手モイセスはあっさり落とし、女子のモニカは競り勝った。インファンティール男子に勝ち目がないのは明らかだった。しかし、2ゲーム目、私はモイセスを集中的に応援するという失策を犯した。いや、選んだというべきだろう。私はフベニイールの女子選手たちをどう扱うべきか迷っていた。高慢でわがままなモニカと練習嫌いで勝手な行動ばかりするマガリ、自他ともに認める実力派でもっとも期待され、注目されることにも慣れたこのふたりを、私はこれまで指導したいとも思わず、事実そうしたこともなかった。

突然監督になったとはいえ、いまさら彼女たちが私を頼りにするとも思えなかったのだ。2ゲーム目、モイセスは勝ったが、モニカは15－20の劣勢から挽回しながらもジュースで落とした。ペルー陣営に動揺が走った。モニカは負けることのない女王様だった。そのモニカが！　ブラジルが急に色めき立ち会場が騒然とし始めた。

ここは敵地ブラジルなのだ。モイセスは結局3ゲーム目を取れなかった。すでに迷う余地などあろうはずがなかった。ペルーのみんなが優勝を信じているフベニイールの女子が窮地にたたされている、そしてその監督が私なのだ。

モニカの相手は日系のユキ選手。シェーク異質攻撃型で、アンチスピンをバック側に使って、ボールが浮いたところを強烈なフォアスマッシュで決める戦術で、シェーク裏裏でハーフボレー主体のラリー戦を得意とするモニカにとっては、やりにくいタイプの選手だった。

3ゲーム目、ユキが強烈なフォアスマッシュを炸裂させるたびに、ブラジル応援団の歓声と観客が踏み鳴らす足音で場内が騒然となる。モニカはそれを意ともせず毅然としてボールに向かっていく。その精神力と必死のプレーは感動的ですらあった。

いまや会場中がペルーとブラジルの女の戦いに注目していた。しかし、一度波に乗った相手は最後まで崩れなかった。19－20でユキのスマッシュが、モニカの燃えるような執念を打ち砕いたとき、飛び上がって喜ぶブラジル側に対し、ペルー側は声もなく重苦しい沈黙に包まれた。「マガリ、絶対勝ってよ。優勝するのは私たちよ！」。歯を食いしばって2番手のマガリを真っ先に激励したのはモニカだった。

モニカの言葉にうなずくマガリも緊張で顔面蒼白なのに眼光だけは鋭く、ただならぬ気迫と闘志をみなぎらせている。彼女たちは自分のために戦っているんだな、と気づいた。マガリはシェーク裏裏、フォアはクセのあるフォームで不安定だが、鋭く安定したバックハンド攻撃と頭脳プレーで試合となるとめっぽう強かった。

対するは、ブラジルただひとりの白人選手のカルラ。サウスポーでシェーク裏裏のパワードライブ型。攻撃パターンの少ないマガリのほうが苦しい試合を強いられた。

1ゲーム目を失ったマガリに、私は、フォア前の小さいアップサービスから3球目攻撃とラリーでフォアをついて相手を台から離すことの2点を指示した。マガリはアドバイスを忠実に実行し、数少ないチャンスを必ず決めて、強ドライブで加点するカルラと一進一退をくり返した。3ゲーム目は、まったく点差の開かないシーソーゲームとなった。会場中にピーンと張りつめた緊張の糸の上をマガリが必死で綱渡りしているように私には見えた。18－17としてマガリのサービスになった。よし、いけるぞ！

しかし、フォア前アップサービスからのスマッシュは無情にもネットにはじかれてオーバーミス。そして次のとっておきの下回転サービスに対するカルラのレシーブがネットを直撃、ポトリとこちら側に落ちた。思わず飛びつくマガリの手から離れたラケットが空を切った。

ブラジルは狂気し、ペルーは天を仰いだ。ラケットとボールを拾いあげて再びコートに向かったマガリに、ついに運命の女神は微笑んではくれなかった。

お祭り騒ぎのブラジル側とは対象的に、精魂尽き果てたマガリを迎えたペルーベンチの静けさは、お通夜のそれだった。体育館の隅から、じっと試合を見守っていたモニカが現われ、ふたりとも無言でダブルスに臨んだ。涙をこらえ、立っているだけでもやっとのふたりでは、もはや試合とは言えなかった。

それでも「まだ負けたわけじゃない。これからがんばれば逆転できるじゃないか」という私の励ましに応えて、モニカが「バモス（がんばろう）、マガリ！」とやる気を見せ、2ゲーム目は競り勝った。が、がんばれたのもそこまでだった。

「勝たせてもらったな。勝負は時の運だから」。古川さんの慰めにも、もはや言葉を返す気力もなく、やり場のない疲労感だけが残った。

インファンティール男子は0－5で敗れて3位、フベニイール女子は0－3で2位、痛恨のそして完全な敗北だった。

ホテルに着いたときは午前1時。情けなさと悔しさにまみれて、まんじりともできなかった。

『今日はボクの人生の中で記念すべき最悪の日』と日記に記してある。

後半の個人戦が幕開けしようとしていた。

（つづく）

フベニイール女子団体の表彰式
手前マガリとモニカが不満げに立っている

『地球はピンポン玉』〈3〉

ペルーの国内大会にて、地方の選手らとともに写す。地方の選手はインディオが多く、首都の選手に対する対抗意識が強い

ばらばらで孤独な選手たち

ペルー選手たちはそれぞれがひとりぼっちである。互いに親しく話しているようでも、目に見えない壁がその間にあって、本当の友だちにはなかなかなれない。彼らには生まれつき、メスティース（インディオと白人の混血）、スペイン系・イタリア系・ユダヤ系の白人、中国系・日本系の黄色人といった人種や民族の違いがある。最低賃金レベルから中流、そして金持ちと上流階層までといった社会階層や経済レベルの大きな違いがある。その違いを乗り越えて彼らがいっしょにいるのは、卓球という共通のスポーツがあるからなのだ。

しかし、その卓球を通じたつながりにも限界はある。しかも個人競技であり、勝負の世界である以上、のめりこめばのめりこむほど、より激しく勝負と向かい合うことになり、表面では仲間としてつき合っているようでも、心の中では激しいライバル意識を燃やすようにもなる。特に実力があり、自己主張も強い女子選手たちの間でその傾向が強く、チームとしてのまとまりもあまりなかった。

そんな雰囲気に耐えかねて、両親とも日系人のナンシーが、試合前、急に泣き出してしまった。理由をたずねると、

「だれも私のことを応援してくれないんだもん」と、14歳の彼女は涙声で答えたものだ。彼女は、ラウニオンというペルーの日系人学校のクラブの選手で、他の選手といっしょに練習した期間も短く、友だちもいなかった。同じ日系人では、男子キャプテンのダニエル・星選手がいるが、7万人といわれる日系人社会の中で、ふたりはまったくの知らないもの同士で、あまり話しをすることもないようだった。

ヨーロッパやアメリカ的で個人中心の他の選手と違い、仲間意識が強く団結してチームの選手を応援する日本的な雰囲気に慣れていたナンシーだからこそ、なおさら、だれからも暖かい声援を送ってもらえず、ひとりぼっちであることに耐えられなくなってしまったのだろう。

エリアナと組んだ団体戦でナンシーは結局1勝もできなかった。控えの選手をだそうにも、ツッツキしかできない初心者レベルの選手では、どうにもならなかった。

皮膚の色や社会階層の違いに加えて、選手ひとりひとりの実力のギャップが、大会や試合に対する意気込みに違いを生み、ペルーチームをなおさらまとまりに欠けたばらばらな集団にしているのも事実だった。

タナカ足が痛いよう！

個人戦に入ってからも男子はなかなか勝てなかった。フベニール（17歳以下）は予選通過者がひとりもおらず、インファンテ

南米の一般の部の選手たち。左からガルシア、ナタン（ペルー）、私、ウヨア（エクアドル）、カノー、小林コーチ（ブラジル）、前がシングルス最多優勝のイノクチ（ブラジル）選手

国際協力事業団
田中 敏裕
（早稲田大出）

イール（14歳以下）も、ブラジルとチリの壁を破れずに、ダニエルが5位、モイセスが6位に終わった。フベニールの女子だけが順当に勝ち残っていた。インファンティールの女子で期待のエリアナは、ブラジルの一番手で優勝候補のドッティ選手と対戦し0－2で敗れた。

エリアナはペルー女子チームのホープである。負けん気が強い上に、男顔負けのパワードライブと後陣でもプレーできるフットワークは、他国の選手にない非凡さを持っていた。ただ残念なことに首都のリマではなく、地方の町に住んでいるため練習の機会がなく、いつも練習不足なのである。今度の大会前も、2週間だけチームの練習に参加しただけだった。

2年前の南米大会の12歳以下の部で優勝している彼女は、大試合に強いタイプの選手に違いなく、本大会での団体戦を中心とする試合こそが、彼女にとってもっとも効果的な練習になるはずだ、そう考えて、団体戦はずっと練習のつもりで見守ってきた。問題は彼女が大会中に最高の状態まで仕上がるかどうかだった。

「ジャ　ノ　プエド　ガナール（もう私は勝てないのよ）！」

ブラジルの選手に敗れてエリアナはすっかり自信を失っていた。しかし彼女の卓球は一試合ごとによくなっており、もう一度試合をすれば今度は勝てるという確信が私にはあったのだ。励まそうとする私に向かって

「タナカ　ナ　ドクェレ　ラピエルナ（足が痛いよう）！」

歩きだそうとしたエリアナが、突然座り込んだ。体力と気力でボールを拾いまくる彼女の卓球に、足の筋肉が耐えきれずに、けいれんを起こしたようだ。

練習不足でこわいのは、技術以上に体力の低下である。これからの長い敗者復活戦を足を痛めた状態で勝ち抜くのはとても無理だ。すぐさま彼女をベンチで横に寝かせて、足に湿布をあて、マッサージを始めた。次の試合は1時間後である。「だいじょうぶさ。必ず勝てるから」。話しかけるうちにだんだんと気持ちが落ち着いてくる。足の痛みも幸いたいしたことはないようだ。

「タナカ　キエロ　カンペオナール（私は絶対優勝したいの）」

エリアナの心にやる気がもどり、そして何よりも、その必死の目には、私に対する心からの信頼があった。「よし、必ず優勝だ！」。コーチと選手の心が一つになった。

―昨年ペルーで再会した選手たち、二列目の右端の女の子がエリアナ

敗者復活方式

南米大会は、エリミナシオン・ドブレという敗者復活方式で個人戦を行なう。一度負けたものでも敗者復活戦を勝ち抜いて、最後に決勝で同じ相手に二度勝てば優勝できる仕組みだ。これだと、トーナメント方式でクジ運悪く早く負けても、もう一度チャンスが与えられるため、実力どおりに順位がでやすく、大会スケジュールの問題があるにせよ、選手が試合の結果に納得しやすい利点がある。

エリアナと違って、この敗者復活方式で損をしたのがフベニールの女子である。

団体戦のショックから立ち直ったモニカは、1回戦でブラジルの一番手のカルラを破り、クジ運にも恵まれたマガリとともに快進撃を続け、ついに、ふたりとも無敗のまま、ペルー同士の対決を迎えることになった。ふつうならばこれが決勝なのだが、敗者復活があるため、この試合の勝者が決勝に残り、敗者は再度決勝進出をかけて、敗者復活戦の勝ち抜き者と対戦しなければならない。ここで負けた選手が3位になり、勝ったほうが決勝に進出できる。優勝するためには二度その相手に勝たなければならないというわけだ。

敗者復活戦を勝ち抜いてきたのは、団体でモニカが惜敗した異質攻撃型のユキである。きょうのモニカなら勝てそうだが、変則プレーに弱いマガリだと、勝ち目はほとんどなかった。

ペルー同士で友だちとはいえ、チャンピオンを目指すライバル同士の対決である。互いに勝負に際してゆずるような気配も、チームメートと対決するという迷いもまったく見られない死力を尽くした攻防となった。

私は、ふたりにひとことも声をかけることなく、遠くから試合の行方を見守ることにした。

パラグアイで指導にあたる小山博文隊員（右端うしろ）と記念撮影（南米大会）

再度ブラジルとの対決！

再び立ち上がったエリアナの足から、痛みはすっかりひいていた。今度の対戦相手はブラジル2番手のフジイ選手。バック側に一枚のツブ高ラバーを使いボールを返球するだけで、団体戦ではエリアナに勝っている。今回はフォアサイドにツッツかせ、フォアに返ってきたツッツキをねらい打つ作戦で、2－0で雪辱できた。

決勝進出をかけた敗者復活戦の最後の試合は、エクアドルの選手が相手だった。エクアドルの選手はシェーク裏裏で、フォアロングとバックハーフボレー主体の、ピッチの速い卓球が主流だ。相手の速いバックハーフボレーに対しエリアナはミスが出て大接戦となり、3ゲーム目ジュースをくり返した末に、強気で攻め続けたエリアナが、きわどく逃げ切った。

中国の南米訪問団の選手らとともにアマゾン上流の町イキトスにて。左から私、楊敏、ナタン、付強選手

一方、モニカとマガリのペルー同士の対戦は互いに相手を知り尽くした者同士の白熱した試合となったが、総合力にまさるモニカが要所でポイントして決勝進出を決め、敗者復活戦に回ったマガリは、異質攻撃のユキ選手に敗れて3位になった。

その結果、南米大会女子個人戦の二つの決勝が、またもペルー対ブラジルの間で争われることになった。

奇しくも2日前に同じブラジルと団体戦を戦い、たたきのめされたあの同じテーブルで、同時に決勝が行なわれることになったのである。

団体戦同様、4人のコーチがふたりずつ各選手についたブラジルに対し、ペルーは自分ひとりだけというのもまったく同じだ。しかし、[illegible]きだった。表情にも変化の少ないブラジルの日系選手よりも、感情むき出しでアクションの派手なスペイン系白人のエリアナと、派手さはないが鼻っぱしが強く個性派の中国系モニカのほうが、確かに人目をひく存在だった。南米大会というのに決勝の4人中3人が東洋系というのも奇妙な話ではある。

「雪辱！大会最高の日」

さて試合はふたりとも1ゲーム先取して、2ゲーム日を取られ、3ゲームにもつれ込んだ。まず終始リードを保ったモニカが、21－18で団体戦の雪辱を果たして、優勝を決めた。今大会、ペルー初の金メダルに選手団は大喜びだ。

一方、エリアナとドッティの勝負は長びいた。レベルの高くない女子の試合に良く見られるツッツキ合いの展開にもつれ込んでしまったのだ。攻撃好きなエリアナがしびれをきらせて回り込んでドライブを打とうとするのだが打ちミスがでやすく、しかもブロックされたボールを、回り込んだ態勢から連打できずに失点するパターンに陥っていた。

疲れるだけ損というわけで、相手がツッツキしかしなくなったのを幸いに、バックはツッツキ、フォアにきたボールだけを打つ戦術を徹底させた。21－18でエリアナが打ち勝ったとき、ペルーの選手団の一部は「やった、優勝だ！」と早とちりして飛び上がったものだが、これでやっと五分五分。優勝決定戦をもう一度やらねばならない。

ブラジル側から、決定戦をこのまま続けて行なうか、それとも明日にするか、とペルー側の意向を確認してきた。時計を見るとすでに夜中の1時すぎである。常識で考えても14歳以下の女の子の試合をする時間ではない。しかも、何度もフルゲームで敗者復活戦を勝ち抜いてきたエリアナの体力は、すでに限界にきているはずだった。勝った勢いがあるとはいえ、ストレートで楽に勝ち残ったドッティとは疲労度が違う。

ペルー側で決めてくれ、という申し出に、返答に迷う私と違ってエリアナの答えは明快だった。

「ジョ キエロ フガール アオラ（私はいま試合がしたい）！」

よし、やろう。

決定戦が5分後に始まることになった。

決定戦も長びいた。ゲームオールのシーソーゲームとはいえ、試合の主導権はエリアナにあった。私の役目は、ただひたすら激励し、集中力を維持させ、無理打ちをいさめることだった。エリアナの最後のスマッシュが相手コートに突き刺さった瞬間、ペルー側の応援団がフェンスを越えて、コートになだれこんだ。

祝福のキスと抱擁にもみくちゃにされるエリアナを、私は、コーチ用のベンチに座ったままひとりぼんやりと眺めていた。素直に狂喜の輪の中に入ることもできず、安堵感とともに、結局勝利は選手たちのものだ、というほろにがい寂しさと、コーチの孤独をジンワリと噛みしめていた。

突然、歓声の渦の中心からするりと抜けだしてきたエリアナに抱きつかれた。頬に熱いものが押し当てられる。

「グラシアス（ありがとう）、ガネ ポルトウアジュダ（おかげで勝てたのよ）！」

ほてった唇からはずんだ声がはじきだされる。

「フェリシタシオネス（おめでとう）、フガステ ビエン（よくやった）」本当にここまでよく戦い抜いたものだ。エリアナのひとことで、ここまでのすべての努力が報われたような気持ちだった。

彼女の優勝と頬のキスマークは、一生心に残るだろう。

宿舎に帰ったのが午前3時前。日記には「きょうは最高の日だ」と記した。

（つづく）

リオデジャネイロ、コルコバードの丘にて鎌田鹿児島県知事一行と撮影（前列左から2番目が知事）

『地球はピンポン玉』〈4〉

国際協力事業団
田中 敏裕
（早稲田大出）

ペルーが総合3位！

最終日のダブルスにおいてもエリアナの勢いは衰えず、ナンシーと組んだ女子ダブルスで2位、特にモイセスと組んだ混合ダブルスが圧巻だった。得意のドライブで男子ペアと見間違えるほどの攻撃力を見せてブラジルペアを撃破し、見事優勝し2冠となった。

この結果ペルーは、総合得点でもデッドヒートを続けていたエクアドルの255点を抜く271点を上げて3位に浮上した。

親友のペルー人コーチのベガと。この時17才でナショナルチャンピオンになった甥っ子のモイセス

1位のブラジルは661点、2位チリが391点で、ブラジルの圧倒的強さと、チリのレベルアップが目立った大会だった。

南米と世界

南米大会というと（日本から言えば）地球の反対側のレベルの低い地域大会にすぎないように思う人が多いだろう。確かに、アジアやヨーロッパと比較すればレベル的には相当落ちる。しかし、様々な人種・民族出身の参加選手がいて、そのバラエティ豊かな選手たちを、中国・台湾・韓国そして日本からきたコーチたちが、南米各国のコーチに混じって指導しているのだから、そのプレーも各国の選手とコーチの特徴が出て面白いのである。

まず南米の覇者ブラジルは、日本式ペンホルダー・裏ソフトのドライブ型が主流で、選手も日系人が9割以上を占めるという、まさにありし日の卓球王国日本の復活、南半球版といったところである。

これを急追するチリはズバリ中国そのもの。中国式ペンホルダー・表ソフト速攻型を主軸に、異質攻撃、裏ソフトドライブ型を育成しており、中国人コーチの徹底した指導ぶりがうかがえる。また、チリの選手団は非常に統率のとれた行動力と団結力を持っており、自己主張のほうが目立つ他の南米諸国の選手の中にあって異色の存在である。東アジア以外の国でペンホルダー主体のチームというのは、このチリ国だけではなかろうか。

この2強国につづく、ペルー・ベネズエラ・エクアドル・アルゼンチン・コロンビア・ウルグアイ・パラグアイといった国々は、シェーク裏裏の両ハンド攻撃型が主流である。

かくして、南米大会は、南半球における日・中・欧の一大決戦の場と化すわけなのである。

ブラジルと日系社会

閉会式の翌日、私は単独でブラジル選手団のバスに乗り込んでサンパウロへ向かった。サンパウロの卓球事情を知るということのほかに、ブラジルに移住している伯父夫妻を訪問するという目的があった。

サンパウロまでの道すがら、春（10月）のやわらかい陽ざしや、草木の緑が、試合の疲れをやさしくいやしてくれる。ペルーの場合であれば、海岸地帯（コスタ）だったら、ひとたび町の外へ出ると荒涼とした岩の砂漠が待ち受け、まばらな草や低い灌木群があるだけの不毛な土地になる。雨が少ないため町全体も白っぽく、そしてほこりっぽい。ブラジルは国が大きい（日本の23倍）ばかりでなく、土地も肥えていて、緑が豊かなのだから同じ南米でもうらやましいかぎりである。

サンパウロのスケールの大きさにもあきれてしまった。高層ビルが立ち並び、その間をだだっ広い高速道路が走っている。東京を抜く一千万都市としての貫禄十分である。地下鉄が一本だけ走っている。

バスから乗り換えリベルタード（自由）という駅で降りた。すると「あー、私の恋はー」とあの松田聖子の歌声が聞こえてき

はその中央省庁で要請を決めて全国各地区に割り当てるところもあるが、この場合、現場へ行ってみると、だれも要請した覚えがないと相手にされなかったりすることが起こりやすい。現場から直接要請される場合もあるが、この場合は、いざ隊員が行って活動しようとしても、上の省庁の予算や協力が得られないということが起こりやすい。問題の根源は、途上国の政府組織の機能がうまく働かず、各組織間の連絡・調整が不十分なこと、人事の交替や方針の変更が多くて、やることに一貫性・継続制がないことにあるのだ。

〝継続は力なり〟スポーツにしろ学問にしろ、成功の陰にはたゆまぬ努力があるわけだが、途上国ではこの努力が続かず、なかなかひとつのことをやりとげるのがむずかしいのである。

モレノ会長もグラディス前会長とは何ひとつ仕事の引き継ぎもせず、体育庁も長官が替わったので日本の協力隊員のことなど頭にない状況だった。私は根気強く協力隊について説明し、自分が外務省そして体育庁を通じて、連盟に配属されたコーチであることを話したのである。

それ以後も、連盟からは何の指示もなかった。私は開き直って自分のやりたいように行動することに決め、夏休みの間は、夏期講習と午後の連盟での練習を日課にし、そして密かに念願だったUSオープンに出場する準備を始めることにした。ペルーの選手にしても自分にしても、世界のレベルを目標にしないかぎり、結局は〝井の中の蛙〟になってしまう、と考えたからだった。

USオープンへの切符

会員制クラブの中華レストランにて。左端にいるのが中国人の陳コーチである

地方で指導していた陳コーチと巽コーチが首都にもどり、劉コーチと3人で連盟にやってくるようになり、ペルー人のベガコーチと私をふくめて5人のコーチが練習場に顔を揃えるようになった。選手の数よりコーチの数のほうが多い、という珍現象も起こり始め、同時に中国人コーチ内での確執も見えだした。彼等も、〝船頭多くして船山に上る〟のたとえのごとく、主導権争いや相互不信にかられているようだった。だれがナショナルコーチを担当するのか？

男子は？　女子は？　一般は？　ジュニアは？……といった具合で、仕方なくローテーションを決めて交互に担当しようと始めた。当初はよく仕事にあぶれた中国人コーチの陳とベガと私の3人で、卓球談義やペルーの生活について不平不満をぶつけあったりして、互いのうさ晴らしをしたものだ。大柄で肝っ玉の太い陳とはよく気があった。

その後、2年目に入るころには、陳が男子監督、巽が女子監督で、私が全体のコーチ役という分担で、練習もスムーズに運べるようになったのだが、当時の自分にとっては、中国人コーチたちと共存していく道を探すことが第一で、やる気と体力プラス語学力で信頼関係と実績を築いていくほかなかった。それでトレーニングと練習だけはだれよりもよくやった。特に選手が帰ってから夜10時ごろまでの1時間あまり、ベガコーチを相手にフットワーク主体の練習をやりこんだ。長年子供らに教え続けてきたベガは、バックハーフボレーだけは一級品の腕前で、練習はいつもベガのバック対全面で、へとへとになるまで走らされた。ランニングやサーキットトレーニング、ひとりっきりのサービス練習、まさに卓球三昧の日々だった。

USオープンに参加するためには、まず意思と実力そして財力のある選手を組織する必要があった。そこで男子ナンバーワンで無二の親友でもあるワルターにまず白羽の矢を立てた。案の定、彼は大賛成で「絶対だぞ！」とこっちが逆に念を押されて、申し込み方法も彼の米国に住んでいる友人を通じて確認してくれることになった。あとジュニアのマヌエルと、実力は落ちるが参加費を工面してきたサンチェスが加わって団体戦メンバーはとりあえず揃った。問題は私が選手としてプレーできるか、である。まず協力隊事務局に大会遠征という目的で米国行きの許可を申請し、承認を受けた。日本の卓球関係者にも手紙で問い合わせてみたが、ペルーで出場する分にはかまわないだろう、とのこと。モレノ新会長もオープン大会であり、ぜひペルーから出場してくれ、と言ってくれたので、いよいよ自分としては初の国際大会に地球の反対側のペルーから出場できる道が開けたのである。

経済的にも貧しく、社会的にも不安定な国ペルー。そのペルーは同時にこんな自分でも夢と可能性を与えてくれる国だった。

二つのハプニング

USオープンに備えて私は日本から出場しそうな選手のビデオやシューズ・ユニフォームなどを送ってもらった。しかしこれがペルー税関の一斉ストにぶつかり、通関しようにもできなくなってしまった。2カ月あまりも続くストについに業を煮やした私は、知人の紹介で税関で働く人に大金を渡し、なんとか取り出してくれるように頼むことにした。これは一種のワイロとも言えなくもない。

途上国ではワイロなのかチップなのか、正当な報酬なのか、区別がつきにくい場合が多い。政府を含めてコネやお金で物事を運ぶことに対して罪悪感が少なく、当然のことのようにそういったことが行なわれているのである。だからと言ってわれわれがそれを利用するなどもってのほかなのだが、私のほうにも大会を目の前に手をこまねいているわけにもいかない事情がある。まったく税関や郵便局が何カ月もストをするなど非常識（日本では）なことをするのが悪いのだ。と憤慨して、何度もその相手と連

女の子の手をとって打ち方を教えるマリオ・アルバレス選手。ドミニカ共和国の国民的ヒーローでもある彼は、社会的な活動にも熱心である。―ドミニカ共和国にて―

絡を取り、税関に足を運ぶのだが一向にらちがあかない。だんだんそいつがとんだ食わせ者で、まったくやる気がなく金目当てだけだったとわかってきた。

結局、ストも終わらず取り出せぬまま出発の日を迎え、あまりの悔しさに地団駄踏み鳴らしながら飛行機のタラップをのぼるはめになった。後日談になるが、アメリカから帰ってやっと取り出した箱を開けると、シューズとユニフォームが全部盗まれていて、まさにトリプルショック。よくあることとはいえ、この土地で生き抜く厳しさを思い知らされたのだった。

二つめのハプニングは、ペルー卓球界にとっては歓迎すべき画期的なことだった。大会間際になって突然女子チームの参加が決まったのである。私を中心に男子がUSオープンに参加するということで女子選手や連盟側も相当刺激されたようだ。急きょモレノ会長の娘でしばらく引退していた二児の母パトリシアが現役に復帰し、モニカと若手のエレナ、クラウディアといった選手が参加、中国人の巽コーチに、連盟の役員ふたりが団長と副団長になり、モニカの母親が付き添いとなって、一挙にペルー大選手団が結成されてしまったのである。まさに〝ひょうたんからこま〟であるが、気心の知れた選手らと自分の思うように大会に集中しようと考えていた自分にとっては、思わぬ気苦労の種がふえたというのが正直な気持ちだった。これだけの選手や卓球関係者を前に恥ずかしい試合もできないという重圧もあった。まさにペルー選手としても、コーチとしても、正念場を迎えることになったわけである。

俺のマイアミオープン!

6月21日午前2時発のマイアミ行きに乗り込む。今年はUSオープンに先立ってマイアミオープンが開かれるというので、この機会を最大限に生かそうと早速参加することになったのだ。団長がマイアミには詳しいらしくマイアミビーチ沿いの共同炊事のできるアパートホテルを見つけて宿泊。青い海と異様に白く長いマイアミビーチは、まさに絵に描いたような美しい浜辺なのだが、ビーチ周辺は人影も少なく、余生を送る老人の姿ばかりで、なんとなく薄気味悪くもあった。

マイアミオープンには、アメリカの選手以外では中米の特にカリブ海諸国からの参加が目立ち、黒人の選手も多かった。戦型はみんなシェーク裏裏の前・中陣の両ハンドドライブ型である。

私はシングルスのほかにもワルターと男子ダブルス、パトリシアと混合ダブルスを組みフルエントリーしていた。中国式表ソフトの前陣攻守型である私は、ただひとりのアジア人で、しかもよく飛び跳ねるし、やけに気合いは入っているしで、ことさらに注目をあびることになった。しかも相手が、慣れない表ソフトのボールについてこれずに自滅することが多く、私の快進撃にも弾みがついた。

この大会で私と格好の好敵手だったのが、カリブ海はドミニカ共和国出身のマリオ・アルバレス選手である。ラテンアメリカチャンピオンでもある彼は、試合度胸も経験も十分。私のスマッシュを後陣でラケットを左手に持ち替えてカウンタースマッシュをして見せたり、足の下から投げ上げサービスを出したりアクロバット的な技を見せて観衆を湧かし、相手のペースをかき乱す器用さと図太さを持つ面白い選手だった。対する私は、固いショートと速攻で確実にポイントをかせぐのみ……。

マリオとはプレ・トーナメントの決勝と、本戦の準々決勝で対戦し、どちらも3―1で撃退することができた。練習量と集中力の勝利だった。それから3年後に今度は私がドミニカ共和国に赴任して再会することになったのだが、当時のふたりは知る由もなかった。

準決勝でエリック・ボーガン選手（米国）と対戦した。勢いに乗って撃破しようと意気込んだのだが、やや弾むアンチ面での独特のバックハーフボレーで先手を取られてはコーナーを厳しくつかれ、まったく勝機なく敗れ、世界の壁を見せつけられた。

とはいえ、中米やアメリカの選手が参加する中で、プレ・トーナメントに優勝、本戦3位、ダブルス3位、混合ダブルス2位という成績をおさめることができたのは、予想以上の大収穫であった。女子は、モニカが決勝でカナダのドモンコス選手に3―2で競り勝って予想外の優勝を成しとげ、まさに〝ペルー旋風吹き荒れる〟という感があった。

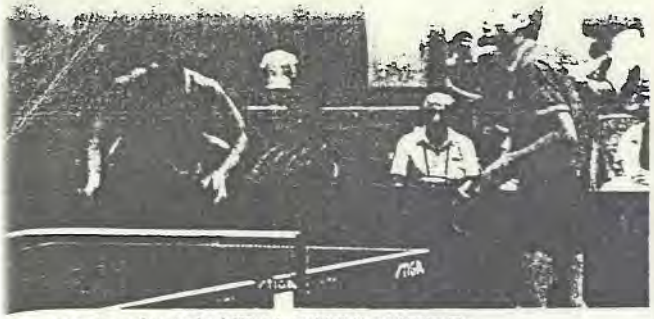
私にとっても選手にとっても成功し、コーチとしても認められるようになった価値ある、思い出に残る大会となった。

次の目的地はラスベガス。いよいよ夢に見たUSオープンが待っている。（つづく）

モニカとブラジルの叶選手結婚式。右端がモニカの父親で、左は最近まで体育庁の長官だった日系のヘラルド　マルイ氏

『地球はピンポン玉』

〈最終回〉



USオープン。江加良選手との対戦前の練習風景

クラブ対抗戦で優勝！

砂漠の中の不夜城ラスベガスは、世界中にカジノの町として知られている。ホテルの一階フロアがカジノになっていて、トランプ・ルーレット・スロットマシン……など、ありとあらゆるゲームに札束が吸い込まれてゆく。USオープンの会場のトロピカルホテルも同様で、私はスロットマシンに挑戦し、1ドルすった。貧乏性で小心者の私は賭け事は好きではない。

卓球会場はだだっぴろいフロアで、2列に50台ぐらい卓球台が無造作に並べてあった。特に観客席もない。USオープンはいつも北米大会や米国ランキング別大会、年齢別大会、身障者大会など、ここぞとばかりに同時開催するので様々な試合に出場できる利点はあるが、とにかく試合数がやたらに多いマンモス大会なのだ。

そんなわけで、私たちも本戦前日に開かれたクラブチーム戦に参加することにした。試合はコービロン杯方式（世界選手権の女子団体方式、4単1複）で、予選リーグは2ブロックに分かれて総当たり方式で行なう。4戦全勝同士でスウェーデンチームと対戦。スウェーデンはアペルグレンともうひとりは見たこともないレベルの高くない選手である。ダブルスを取って先に2対1とリードしたのはなんとペルーチーム。

ここで単複無敗の私がアルペングレンと対戦することになり、がぜん会場は盛りあがった。アルペングレンは当時、大会から離れていて久々の復帰というわけで本調子ではない。しかし私のほうが勝ちを意識してしまい打ちミスが目立ち、あと一歩のところで結局打ち抜けなかった。それでも2対2のラスト決戦をワルターが久々に踏んばりをみせて2－1でもぎとり、予想外の予選リーグ全勝1位となった。

しかし、もう時刻は夜9時をまわり、朝から13試合をこなしていい加減疲労困ぱいである。そこへ追い討ちをかけるように上位2チームずつで決勝トーナメントをこれから行なうという。相手は別組でカナダに敗れ2位となった米国チーム。ボーガンとダニー・シーミラー選手がいないとはいえ、ナショナルチームメンバーが揃っている。コートに入って早速練習し始めた米国チームを横目に、私はベンチで半分ふてくされて横になっていた。少しでも体力を温存したかったし、内心勝てるとも思っていなかった。

1試合目にパンアメリカンチャンピオンのマスターズ選手と対戦。ボーガン同様バックがアンチで変則だがミスも多く、2－1で勝った。続く第2試合、ここで相棒のワルターが一生に何度あるかというような当たりを見せてシーミラー（弟）に圧勝。思わぬ番狂わせでそのあとのダブルスも難なく勝って、終わってみたら3－0の勝利。決勝はスウェーデンに勝ったカナダに決まった。ユーゴスラビアの往年の名選手・コサノビッチとカエタノという選手である。順当に1－1で迎えたダブルスで必勝を期したが、意外にカナダペアは手強く勝機を見出だせぬまま完敗してしまった。この大会、ダブルスで負けたのも初めてならば1－2とリードされたのも初めてである。

ワルターが突然私の手をつかんで叫んだ。

「タナカ、必ず勝ってくれ！　お前が勝てばおれも絶対に勝って見せる！」。

コサノビッチはしっかり回転がかかったフォアドライブとバックハーフボレーを主体に、相手に圧迫感を与えるような言動も交えてペースを操ろうとしていたが、ボールコントロールはいまひとつだった。対する私はもっとひどく、ドライブに対するフォアブロックがまったくできずに立往生していた。なぜかロングサービスからのスマッシュだけが百発百中で、あとはひたすら相手のミス待ちてがまんの卓球。技術水準に関係なく、勝負に対する意地と執念のぶつかりあいで、ひさしぶりにカッと熱くなっていた。

3ゲーム目、18－20と先に王手をかけられた。ここで下回転サービスで相手のネットミスを誘い19－20。次は相手の意表をつこうと、思い切ってロングサービスをバックストレートに出した。左利きのコサノビッチは読んでいたのか、すぐに回り込んでまたストレートへフォアドライブを放った。当てがはずれたとはいえ私もからだの動くままに回り込み、ままよっ、とストレートにカウンタースマッシュ！　相手が一歩も動けない鮮やかな一本だった。そのまま2本連取して逆転勝ち！　ワルターやペルーの選手らが興奮して抱きついてきた。

ラスト。闘志満々のワルターと、自分までこないだろうとたかをくくっていたカエタノとでは出足から勢いが違っていた。2

国際協力事業団
田中 敏裕
（早稲田大出）

青い海のようなチチカカ湖上にて。左端がエルネストで、あとはチチカカ湖に浮かぶタキーレ島の島民たちである

10で見事に男の約束を果たしたワルターと抱きあって、初めての優勝を喜びあった。

6月28日午前1時、いつの間にか私は24歳の誕生日を迎えていた。朝から数えて単複合わせて18試合で16勝2敗、相手のレベルにばらつきがあったとはいえ、この試合数は多すぎる。

南米大会で、その試合運営のいいかげんさにあきれたものだが、先進国のはずの北米でも実情は似たりよったりである。違う点は南米だと身内同士のような気安さがあるが、北米だと、より個人本位な割りきり方とドライさを感じさせられる点であろうか。

USオープンの思い出

USオープンには日本から女子の第一勧銀チームだけが参加していた。川東選手とは同郷のよしみもあり、久々の日本語（鹿児島弁?）が懐かしかった。

さて肝心の本戦に入ってからはどうにも戦績はふるわず、単・複・団体ともに早々と姿を消してしまったのである。理由はいくつかあげられよう。相対的なレベルの高さと私自身の肩がもう限界にきていたこと、ラバーの摩擦……などなど。しかし、やはり世界で活躍するにはまだ実力不足だった、という一言に尽きるだろう。

男子シングルスは、台湾（中国台北）の呉文嘉選手がアペルグレンを破って優勝し、台湾勢の台頭ぶりを印象づけた。

翌1985年、私はペルーチームを率いて再度USオープンに挑戦した。世界チャンピオンになったばかりの江加良選手（中国）に、スウェーデンのワルドナー・リンド、西独（ドイツ）のベームといった強豪が参加し、例年になくハイレベルな大会となった。そして幸運にも私の誕生日というその日に、私が卓球の理想の型として憧れ研究していた江加良その人と団体戦で対戦する機会に恵まれたのである。私の胸は高鳴り踊った。

第1ゲーム、バックのプッシュの応酬から思い切ってぶちかました私のスマッシュが、江加良のフォアサイドをノータッチで抜けていった。思わず観衆がうなり、メインテーブルでもないわれわれの試合に人垣ができはじめた。

受け身の世界チャンピオンに対し、捨て身の回り込みスマッシュでその堅陣を崩す無名のペルーの日本人。バックプッシュでは私が押し気味なのだが、プレー全体にゆとりと幅がない分、どうしても攻めなければと心理的プレッシャーがかかってくる。

幸い回り込みスマッシュが冴えて五分以上の白熱した展開となり、1ゲーム目を18本で落としたものの2ゲーム目は18本で取った。しかし勝負の3ゲーム目、中盤で離されて結局15本で力尽きた。負けたとはいえ、燃え尽きたという爽快感が残る、私にとって記念すべき思い出の試合である。

シングルスではリンド選手に3−1で敗れたとはいえベスト16に残り、まずまずの成績をあげることができた。

懐かしかったのはワルドナー選手とソーニャというスウェーデンのクラブ選手との再会。実は4年前に当時まだ14歳でおチビちゃんだったワルドナーやソーニャたちが日本に練習にきたとき、私は1週間ほど通訳で付き添い寝食をともにしたことがあったのである。今では背も高く、世界のトップ選手になったワルドナーに、次は世界をねらってほしいと話したものだ。

アンデスのサンタクロース

ペルーで迎える2回目の年末年始を、私はアンデスの山奥で迎えてみたい、と思いたった。以前から地方で細々と卓球を愛し続けている人たちのために何かしてあげられないものか、と考えていたことも大きな理由のひとつだった。協力隊には、活動支援経費という仕組みがあり活動に必要な機材を事務所を通じて購入することができる。私はそうやって日本から送ってもらった貴重な用具の中から普及向きのラケットを十数本持って、アンデスの山村で卓球を愛好している人々に直接手渡して励まそうと考えたのである。

今世界で様々な援助が行なわれているが、物をあげるだけのやり方は、もっとも安易で効果の少ないやり方だといわれている。利用されないまま、あるいは故障したまま放っておかれる援助機材は数多く、「魚をあげるのではなく、魚を獲ることを教えよ」という戒めこそ、援助する側に必要な態度なのである。

その点、卓球のラケットやピンポン玉は少なくとも確実に喜んで使ってもらえる物である。地方で見よう見まねでピンポンしているコーチや子供たちを激励し、なかなか手に入りにくい卓球用具を直接届けてあげることで、少しでも地方の卓球の灯を守ることができればこれ以上のことはない、と私は今回にかぎってはコーチというよりは、クリスマスにプレゼント片手にやってくるサンタクロースでいこうと計画した。

インカ帝国の謎が眠るアンデスの大地、昔ながらの生活を続けるインディオたち、そこにも卓球が好きな人々がいて、優秀な選手が輩出したこともあるという。山を越え、歴史を越え、文明を越えて、アンデス山中へピンポン玉を追い求めてみようじゃないか、と夢はふくらんでいった。

エルネストとの出会い

私にとって兄弟同然のアミーゴ（友人）それがエルネストだ。エルネストは時折練習場に顔を出す、いかにも気の弱そうな目立たぬ青年だった。選手らに練習の相手をしてくれ、と頼んで回るのだがだれにも相手にされず、ついに私のところにきて「お願いだ。せっかく田舎から出てきたのにだれも練習してくれない、タナカ！　少しでもいいから相手をしてくれ」と、今にも泣きそうな顔で懇願してきた。「10分だけだよ」と相手になってあげると、もう大喜びで打ち始めた。

フォームは少しぎこちないが、地方の選手にしてはかなりまともである。

「出身は？」と聞くと、「プーノだ」という。「えエーッ！」。プーノというと標高3800メートルのチチカカ湖畔の町ではないか。そんなところで卓球をしている人間がいるのか。プーノはペルーの民族舞踊の都とも言われるアンデス山地の特徴的な町であり、ぜひ一度は行ってみたい町だった。

アヤビリの練習場にて。ラケットをかざしている私の左がベラスケスコーチで、右から4番目がチョケ氏である

卓球協会が活動しているのはプーノのほかにもアヤビリというこれまた4000メートル近い高地にある町がある。このふたつの町をたずねようと思いたった。

「来年は行くぞ」とプーノのエルネストに電話で連絡したら、闘牛のような荒い鼻息で「ホントか！」と、興奮が電話口から伝わってくるほどの喜びようである。

問題は連絡が取れず、知人もいないアヤビリのほうであるが、こちらは出たとこ勝負で直接行ってみて現地で考えることにした。

アンデスの旅

首都リマのある海岸部が夏を迎えようとする年末年始のころ、アンデス山岳部は逆に日本同様に冬を迎える。高地でもありそうとう冷え込みは厳しく、アルパカのセーターや手袋は欠かせない。私はまずかつてのインカ帝国の首都クスコに飛んだ。機内で買っておいたソローチェ（高山病）用の薬を飲む。クスコは3200メートルの町で、カミソリをも通さぬと賞賛される石組みの城壁や植民地時代の街並みを残す観光とインディオの町である。有名な謎の空中都市マチュ・ピチュはクスコから電車で4時間ほど下がった海抜2000メートルの渓谷にそそり立つ山の頂上にある。

どうしてあんな場所に？　日本では高野山とか比叡山とか、宗教的な中心を山に置く例がある。アンデスの山中深く眠るマチュ・ピチュの遺跡も、見るからに神秘的で、宗教的な霊気を漂わせているように思えた。

クスコの朝は早い。朝もやの中を5時ぐらいから街道は物売りのインディオの姿でざわめきだし、野菜や薬草、アルパカや金銀で作った手工芸品など様々な市が立つ。コカの葉も売っていて私も買ってくちゃくちゃかんでみた。昔からインディオはコカの葉をかんでひもじさをまぎらしたのだそうだが、実際はまったく味気のないものである。

3日目の朝、アンデスを縦走する鉄道に乗り込む。朝早くから並んだのに一等車のキップが買えず二等車になってしまい、これがものすごい混みよう。クリスマス前という時期も悪く、日本のお盆の帰省ラッシュを思い出してしまった。通路は座り込んだインディオとその荷物でごった返し、時折ゼリーやチチャ（紫とうもろこしで作る飲み物）や食べ物を売るおばさんが、人と物をかき分けてやってくる。やおら袋から果物や野菜を出して商売し始める人もいる。数年分のふん尿を凝縮したような異臭を放つ老人が隣にやってきたときは、さすがに息をするのにも困り、まさに閉口してしまった。

アンデス高原を走るこの列車からの眺めは雄大で、のどか。アルプスのイメージとは違ってややうらびれた感じがするのは、見渡すかぎり低い草原地帯と山だけで、高い木が一本も見られないからだろうか。クスコから4000メートルの峠を越え、あとはプーノまでゆるやかな下りで、全部で約10時間の行程である。自分では、高地に慣れたつもりだったが、雪を残す肌寒い峠で外を歩いていると、動悸がすぐ激しくなり、体もだるくなるのを感じる。

アヤビリのクスコから約6時間ほどで第二の目的地アヤビリに着いた。降りる乗客も10人程度しかいない。クリスマス前なのに人通りが少ない。ペルーにはめずらしく町の通りにゴミくずがない。白い土塀に、透きとおるような紺碧の空。堅いアスファルトの舗道を羊を追い立てていく子供が横切った。いかにもアンデスの清楚な山村という雰囲気である。

さて、まずは尋ね人を捜し当てることからだ。ベラスケスというアヤビリ卓球協会のコーチは、エルネストによると「心優しき卓球狂」とのこと。顔も知らない男だが、私はすでに昔からの友人のような気がしていた。住所は捜し当てたのだが、あいにくプーノにいって留守だった。1日1便しかない列車である。帰りは明日か明後日だという。残念ながらまったく連絡もしていなかったのだから仕方なかった。

次に卓球協会の会長の家をたずねてみた。こちらもフリアカという町に出ていて、帰りは明日とのこと。会長の奥さんに宿を紹介してもらってとりあえず翌日まで待つことにした。近くの雑貨屋へ入ると店の老婆に話が通じない。スペイン語ではなくインディオの言葉であるケチャ語でないとわからないのである。すぐに子供が呼ばれて通訳に入った。初等教育を受けた子供たちが、こういうときは言葉の橋渡し役になるのである。その夜は雷雨になった。宿の管理人によると雷がなると火事の恐れがあるので送電を止めるのだそうだ。寒さに震えながらロウソクの灯で日記を書いた。

翌朝は一転快晴となり、会長の奥さんとふたりの息子に連れられてプールに行った。この寒さにと思うのだが、これが天然の温水プールなのである。ぬるいが中に入っている分には問題ない。子供を集めてバスケットをやったが、心臓が口から飛び出すんじゃないかと思うほど苦しくなった。4000メートルの高地トレーニングはそう甘くないようだ。

午後には帰ってきた会長とチョケという卓球愛好家と会い、ソロルサノ会長一家には夕食に招待された。その後チョケ氏の家で卓球をすることになった。家の中に壁をぶち抜いて卓球台が置いてあり、そこで彼のふたりの息子の相手をする。ふたりとも慣れたフォームでラリーもよく続く。チョケ氏が自分で教えているとのことで、その熱意には感服する。彼の夢は再びペルー代表選手をこのアヤビリから出すことだという。

しかし、アンデス山中のこの村で練習するかぎり、趣味的段階から抜け出すのは困難であろう。旅費などの経費もバカにならず、無責任に激励することの不条理も感じないわけにはいかない。

アンデスの山村アヤビリで迎えたクリスマスパーティ。ベラスケスにビールをついでいる

かない。帰る間際にケーナとサンポーニャという伝統楽器を使ったアンデスの民族音楽を、このふたりの息子が演奏してくれた。それはアンデスに吹く風のささやきのような、優しく、力強くそしてもの哀しいインディオの鎮魂歌（レクイエム）ともいうべき音楽である。子供たちにこうした民族の心を継承させているチョケ氏は、数少ない誇り高きアンデスの男のひとりと見受けられた。

翌日はもうクリスマスである。昼食後気分がすぐれず寝ていたところ、起こしにきたのが待ちに待ったベラスケスコーチだった。彼の熱意に感染されて、早速卓球台を一台置いてあるだけの練習場で、子供たちを集めて練習することになった。ベラスケス自身も子供たちといっしょに列に並んで真剣にボールに向かっていた。アヤビリにきてほんとうによかったなぁ、としみじみ感じた瞬間である。持ってきた用具をベラスケスに、ぜひ卓球指導に役立ててくれ、と手渡した。

夕食を会長一家とレストランですませたあと、夜はベラスケスに連れられて彼の知人宅のクリスマスパーティーに参加した。12時になった瞬間「フェリシタシオス（おめでとう）」とみんなで抱き合ってキリスト生誕を祝福し、「サルー！」とビールで乾杯。朝4時まで飲んで踊って、宿にはもどらず、気がついたらベラスケスのベッドで寝ていた。

エルネストとの再会

プーノ駅はあいにくの雨だった。雨やどりしているところにエルネストが息を切らしてかけつけてきた。子供たちもいっしょである。手に『ようこそ、タナカ』と刻まれたラケットを持っている。ホームでこれを振っていたんだと聞かされて、思わず胸が熱くなった。信じられないことにエルネストは旧式のジープを運転してきていた。父親の車らしいが、このペルーのしかも田舎にあって車を持つことはたいへんなことである。道行く人に声をかける姿といい、リマ市で見た時の彼とはまるで別人のようである。家ではまず家族に紹介された。私の滞在用の部屋もすでに用意されてある。ベッドはアルパカの毛布で、寒さに凍えることもなさそう。まさにいたれりつくせりで夢のようである。

エルネストの家に集まった大学仲間のフォルクローレ（民族音楽）の演奏に加わる

翌日からは午前中体育館で、台を2台使って5～6人を相手に練習し、午後はプーノの観光と市内見物というスケジュール。最近創設したばかりというプーノ卓球協会は実質エルネストが動かしている。人望があって、子供らにも好かれている。練習以外の時間でも家に遊びにきては、私の案内や遠出に連れてくるので、いつも動くときは大人数になった。

ナショナルチームのコーチだということで、ラジオの取材も何度も受けた。自分が話す声を茶の間で聞くのはなんとも気恥ずかしい反面、誇らしい気分にひたれるものである。結局、1日1日と滞在を延ばし1月3日にエキシビション（模範試合）を大々的に行なってから帰路につくことにした。

ラジオ放送の甲斐あってか、当日は観客も集まって、プーノの選手たちも心持ち緊張気味。1時間半の中で、基本打法やフットワークのほかスマッシュ対ロビングや、台の周囲を回りながらのラリー、そしてダブルスとシングルスの試合を披露した。富士山より高い海抜3800メートルのプーノで打つボールは、空気抵抗が少ないため速くて遠くへ飛んでいくので、コントロールがむずかしい。しかし、選手たちも一生懸命で内容もまずまずの合格点。とにかく、みんなにやる気が出てきたことが一番の収穫だったと言える。

民芸品の好きな私のため、選手たちがそれぞれ贈物を持ち寄ってくれ、ポンチョ、サニポーニャ、トトラ舟の模型、インディオ人形、祭りの仮面……などがつまった旅行カバンを持って、私はプーノを旅たった。私はサンタクロースなどではなく、実際は彼らこそ私のサンタクロースだったのだ。

グラシアス（ありがとう）！　アンデスのピンキチたちよ。

ペルー最後のお別れパーティの席上でフィナ選手と「上を向いて歩こう」を歌う（バイオリン奏者は同じ隊員の岡さん）

結びを序に代えて

4カ月後、プーノ卓球協会が〝タナカ杯卓球大会〟を開催し、私もワルター選手を連れて大会に列席した。以来エルネストとは5年以上会っていないが、手紙や電話の交信は続いている。最近はプーノの周囲でもゲリラの攻勢が激しくなり、彼も一度、殺されかかって、今では国外脱出を考えていると書いてあった。

千葉の世界大会にはペルー選手団も参加し、懐かしい選手たちと再会することができた。ワルターの弟ヤイルと女子のマガリは、いまアメリカの大学に卓球を条件に入学して、勉強と練習に励んでいるという。モニカはカノーとの第一子を懐妊したばかりで、今回は観戦だけだった。

戦争と平和、貧困と富み、この狭い地球上では、信じられないほどかけ離れた境遇の中で同じ人間たちが暮らしている。しかし私たちは、互いに決して理解し得ないわけではないし、私のペルーでの体験もそれを裏づけているものだったと信じている。千葉大会での南北朝鮮の統一チーム『コリア』の実現は、その点、卓球界が成し遂げた平和への大きな貢献だったと言える。

世界も変われば、日本も変わる。世界の人々の日本人を見る目も変わり、日本人の世界の人々を見る目も変わってきている。しかしそれが理解によるものなのか、偏見によるものなのかは疑問だと思う。

私たちに求められているのは『この地球がピンポン玉であるという認識を持って、すべての隣人たちと同じテーブルにつき、もっと白球を打ってみることではないか』と思うのである。

（完）